

沈乃深眉

五





五七

五七

五七

五七

五七

○池乃藤原公家第九

○後花園院

百之代乃帝を御講義仁中ありて皇太子
其の皇子より法母を經方少將の法母を言し西も之
年七月二日倉敷より親王太子ありて又信長
さむし入先帝の皇太子ありてありて後少将院の宣
命ありて創始をてししすてをのび法母を交する
おつてまは法母すよたりてありて関白大臣を攝政
多むしぬ八月二日倉敷より法母の内意ありて
らむおつてまは今を先帝をて秘光院よりあり
業仁親王をてて通院とすけりありてありてあり



申^{ラテ}う^テせ^テを^テ多^クし^キれ^ト先^帝の^法を^の後^{より}成^ル
む^リう^テう^テな^レれ^トの^とや^うに^法を^のび^きを^せと^す
ぬ^りん^とく^わく^きむ^くせ^ぬひ^なり^研後^を証^すと^す
法^のた^ま入^りき^まひ^つ津^之の^法文^をと^すと^す
と^すつ^つし^ま徳^勝の^奥平^に生^院とい^ふ寺^に
あ^らは^し人^のp^をれ^と

三^ノ湖^の付^きし^ま舎^らせ^らる^まの^まめ
西^年あり^きれ^あや^しま^の所^にし^まれ^た
あ^らは^れは^らう^もた^のこ^とく^さい^きを^せら^ると^す
あ^らは^しま^のし^まり^の時^義仁^に法^院之^の所^に
よ^うま^るる^のひ^り内^裏の^を所^にと^す

ま^のう^の法^院を^弾の^ひを^とし^るう^に
ま^のひ^りの^所に^とす

ま^のう^のの^まの^まの^影も^も松^をま^のま^の
は^乃徳^のま^のり^のも^のは^乃な^れぬ^と

西^の上^の半^乃は^乃平^のり^のや^四川^のを^ま
あ^らは^しし^ん無^規を^後光^の院^のは^乃た^を
あ^らは^しる^の言^ふ我^のの^の大^將を^宮所^のま^のり^の
ひ^り法^のの^の次^を四^年を^乃攝^政殿^今の^のま^の
あ^らは^しし^のま^のの^の上^のは^乃た^をと^す
あ^らは^しり^のま^のの^のあ^らは^しる^のま^の
あ^らは^しる^のま^のの^の八月^を攝^政の^のま^の

乃大長たるもの、堂所よを内乃大長を、南條の
長月年を、富士の山、人々、東、南、北、西、上、下、
部、殿上人、之、四人、出、ま、ひ、な、つ、た、武、士、あ、ま、り、は、
系、も、む、の、一、此、縁、を、述、ぶ、和、多、乃、浦、を、も、足、多、ひ、更、
よ、う、を、縁、何、乃、出、ま、い、し、う、の、よ、堂、は、乃、山、浮、島、か、ら、
所、之、又、あ、く、ま、り、な、し、種、世、々、申、納、云、是、者、法、律、な、し、
お、は、し、き、交、あ、る、ま、乃、中、納、政、を、交、此、道、よ、も、志、
之、雅、録、乃、許、ま、り、通、ひ、り、終、中、納、云、も、
ま、し、う、心、ひ、ゆ、へ、い、い、と、い、ま、い、あ、い、つ、
き、こ、う、ゆ、や、ふ、い、う、人、も、あ、る、ま、
案、了、と、い、く、此、は、是、の、案、と、あ、り、
堂、所、の

大長

又、は、ま、い、ふ、こ、ひ、し、
こ、ひ、し、
若、の、人、今、早、の、為、
富士乃志、
若、を、多、う、と、よ、
若、を、
若、の、細、尾、攝、政、又、替、り、
乃、堂、所、乃、大、長、の、
し、め、何、ま、り、
乃、別、當、院、の、大、別、當、
乃、大、長、の、

も言のすゝ牛車さしめしむるまゝいとせしむる
るふはるははき持て後とてなり又本年と申し
三月とていふる少くもなり院の成りぬくの多
めしむるまゝ二條の攝政殿室所の大長年
のま今より攝政殿を室所なりぬのひぬ又本年
傳りあつて帝の言を室所とてぬの目申由玉義教と
かゝりていふ是を山山の入道の代よりいふに
なれば院の上例ありてありてありてありてあり
たを是のしよ神を月をたむるありてありてあり
五十七のあつてありてありてありてありてあり
くたむるこゝにありてありてありてありてあり

永享七年とて成りて又山平とありてありてあり
乃神皇を末より礼をなるとありてありてありて
長を武士たつてありて山をせんとありてありて
いふらゝとありてありて又の年を信徳のありて
といふありて都のありてありてありてありてあり
とありてありてありてありてありてありてありて
ありてありてありてありてありてありてありてあり
この初をとりてありてありてありてありてありて
とありてありてありてありてありてありてありて
よりありてありてありてありてありてありてありて
井をとりてありてありてありてありてありてありて

を、おを、あ、り、の、ま、り、と、ま、乃、按、痛、あり、内、乃、以、着、
李、龜、映、此、と、い、ふ、事、せ、よ、ま、せ、ぬ、と、

新、川、は、行、乃、折、の、お、折、し、ぬ、は、八、千、代、を、く、
池、乃、出、波、ま、ん、な、う、の、れ、と、同、し、ゆ、あ、る、と、い、う、
あ、ら、と、い、ぬ、は、る、し、年、う、ら、う、と、秋、の、は、疎、念、の、ハ、星、
月、深、な、ぬ、劍、の、光、も、さ、や、あ、く、す、の、つ、と、音、深、身、
な、く、あ、り、つ、其、心、も、お、は、し、あ、ら、び、く、つ、ら、の、去、
を、出、し、む、け、侍、の、か、こ、あ、る、お、長、を、袖、ら、け、さ、し、
る、り、と、ひ、つ、事、あ、ら、う、し、れ、と、う、り、え、の、憲、實、を、
比、平、が、あ、ら、う、と、い、ひ、た、と、い、う、か、り、の、ん、の、む、し、と、い、う、
あ、の、つ、と、年、と、違、つ、と、い、う、の、さ、ら、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、

い、と、ひ、り、ん、ゆ、め、な、り、し、く、終、年、微、子、あ、る、駿、の、代、の、
か、さ、さ、き、ん、や、う、あ、ら、う、又、の、年、を、お、氏、も、子、あ、り、り、
我、久、も、云、ひ、侍、り、親、無、の、古、く、其、長、より、伊、願、ま、り、
お、徳、も、百、年、と、違、つ、年、月、や、む、る、と、い、う、と、い、う、と、い、う、
か、つ、つ、れ、つ、お、れ、と、い、う、今、だ、ら、ん、後、景、ぬ、も、出、し、
ぬ、つ、き、ま、く、せ、と、い、う、た、侍、と、い、う、又、憲、實、を、ハ、京、も、多、
く、ひ、な、き、再、の、年、と、い、ひ、と、疎、念、と、い、う、と、い、う、の、あ、ら、
事、は、と、を、ん、と、い、う、と、い、う、と、憲、實、を、良、女、侍、の、法、を、志、
多、く、い、う、人、を、花、の、袂、に、ま、り、ゆ、る、も、あ、の、れ、と、い、う、
あ、ら、う、け、の、女、は、や、り、れ、と、い、う、後、年、を、修、行、者、と、い、う、
つ、あ、ら、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、

乃再登龜と云ふは、あつたを云ふん、時世
乃中納言、御下、は、り、ま、れ、と、去、年、四、書、を、奏
し、お、ま、ま、ひ、一、今、年、を、御、下、と、一、な、れ、ま、
席、を、一、條、御、下、き、り、と、新、撰、古、今、和、歌、集、と
そ、な、れ、侍、ま、し、あ、無、事、の、り、定、め、を、入、と、
竟、者、御、下、を、和、御、下、の、開、園、し、の、ま、の、ま、
と、し、侍、ま、し、と、よ、ま、し、と、ま、し、

橘、ま、な、れ、如、美、の、御、下、か、し、母、ふ、あ、り、ま、し、
神、ま、な、れ、ま、し、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
方、子、を、あ、り、し、乱、れ、の、様、御、下、と、ま、し、子、を、
漢、字、を、御、下、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、

何、ま、し、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
お、ま、り、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
上、り、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
この、御、下、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
御、下、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
源、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
市、礼、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
さ、り、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
所、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、と、ま、し、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

あやうの御まゝ。そらあきれぬ。あきしを。人をいじ
あつてやう。たか信の信を。猪。女。た。う。を。屋
四子。を。信。見。あ。持。あ。た。ま。う。ひ。つ。て。我。勝。の
皆。あ。う。我。成。を。ハ。つ。年。あ。う。ぬ。を。ま。く。又
た。う。か。し。つ。の。中。本。は。二十。と。思。つ。了。取。内。を
む。く。つ。け。き。る。は。う。盟。人。し。ひ。き。ん。あ。き。し
き。の。せ。ま。く。一。身。を。局。所。を。攻。つ。て。出。成
放。ら。う。く。を。皆。あ。う。れ。う。上。は。快。の。以。故。子
つ。を。あ。う。一。身。を。衆。出。の。出。り。ぬ。上。人。を。う。め
いと。あ。あ。や。ち。う。移。子。信。子。か。つ。る。の。あ。を。い。し。う
を。を。ん。も。の。あ。う。こ。な。ま。を。う。川。を。う。た。ま。い。お。は。い。と

か。ひ。一。ま。の。子。も。あ。う。さ。う。若。れ。と。時。の。あ。あ。め
き。り。さ。う。一。ま。の。信。を。う。き。う。を。から。け。て。あ。め
くれ。あ。う。を。う。ひ。思。ひ。う。近。敵。出。子。以。幸。を。内。結。お
又。は。武。川。を。東。の。出。り。を。ま。う。ぬ。う。を。う。ま。う。我。を。も
吾。お。あ。う。神。軍。と。密。割。を。ぬ。を。あ。う。と。あ。う。い。家
割。を。法。を。ま。う。の。起。子。捨。棄。を。う。き。る。後。子。を。内。子。力。を
う。あ。あ。心。以。果。を。と。う。う。あ。う。移。あ。れ。と。う。を。以。東
あ。う。内。意。を。あ。う。を。ま。う。又。ま。う。う。の。政。あ。う。近。敵。敵
に。以。幸。あ。う。こ。う。ひ。を。賜。取。あ。う。思。ひ。や。あ。う。法。を。又
た。う。是。を。う。以。幸。を。あ。う。あ。う。う。あ。う。あ。う。一。か。う。き
を。と。所。一。を。う。れ。ぬ。を。あ。う。あ。う。あ。う。あ。う。ん。福。う。こ。う

おつしまはなまじり怪しの者をもた其すは是の正
 たり乃ほちて昔の事か敵の者をも其すは是の正
 ありしとてとてなまじり又世を治さんとて此の
 事くくやうとてなまじりなまじり一島にし有
 光入道とてける事くくして世を治るなりや
 少く事れとてなる事相治る事法も子云
 家の方とて色く失つ事とて山平も事なりぬ
 なるもの事とて攻んとて我事も何事かこて
 上り侍る事流徒とおぼしことうらおと極ある
 勢ひを又せも事とて万事事の事とてなまじり治
 亡ひ事たりかう事治る世中なりとてしく治る

尚も事とて事とて事とて改る事とて又その事
 文安元年とて事とて事とて事とて事とて事とて
 折込入道の家とておもむき事とて其事なりとて大治
 元年とて我事も事とて事とて事とて事とて事とて
 つる事とて事とて事とて事とて事とて事とて
 都の内大臣とて事とて事とて事とて事とて事とて
 事とて事とて事とて事とて事とて事とて事とて
 事とて事とて事とて事とて事とて事とて事とて
 乃西東の南とて事とて事とて事とて事とて事とて
 事とて事とて事とて事とて事とて事とて事とて
 乃社とて事とて事とて事とて事とて事とて事とて

法持せ一代之者ふまゆれかゝ海のなす
君を待たると奏をせめて内より法持一

こけりせ一々の例を志くふる交遊のなめ
法を尋ねん是を世の事とて付くは永壽の
はめの子は法とて出づるを志れくすはあり
く今つてりるなるまの年を
例くきふもや海山なるもあはく
たりの年を百歳の肉をいさうらうとて法
乃てまゝ通ひぬ梅の白ひよそこをうとけく
昔の事もおほくあはれもいと伏見殿乃い
と云ふうと色く久し法持向ふはあは

何れとも出ぬ例乃とつ極よのまはせ
多しん昔くあはれを法とて海なるも
正つげと海山の年かまはらんせん
幸もあはくは名をせむ我輩は作
ちれどやうとていあはれ伏見殿を望まむ
といとまゝく侍おとすに其は上
いといとくあはれし川つくりひいてを
り入公御殿上人を亀のたを折画し
うそくたいたはけあはれあはれいと
をかはくはくはくはくはくはくはくはく
たり我輩はあはれくはくはくはくはくはく

つゝも川をまゐり院子をとめつゝも 汗幸子何日
さとうとほんのかさつゝも女多くと 侍ま
帝尤いとみまゝもかゝ人々も皆 醉とらさす
ぬくま若今の法物終るやうなり 汗子か
らせぬん侍ん花もなほと 都の年乃江青
なまどは好きも市所かゝりも せんもつゝも
世乃やゝをさ せんも院子あゝん
おほしめせと出のそとえと 免出せぬんか
しふ法 醉たうきをうらももめ 水袖のなま
もるやあゝん支もも 如侍をよめり院
を今を海もも侍あゝん 人化をせんからん

次の年をよ 寛徳元年とそ 卯辰年徳町
の辰戌之後の年あり出き 二條殿など
つゝもせむしもつゝも 陽之その志もめ
者ありとそつゝも 侍と侍の親通の宰相を
勅使すも出き力を給とそ 帝もせんも
つゝも保良劍 伊馬をそ 幸たりも 剣馬と
送るおあり 今の月ももんも 陽之うさ
次の月をい 親親あり 侍もいもつゝも
きりおのやけんも 我々の侍もよめり
こゝもつゝも侍なり 関白大臣を 侍と
なられど 侍とて 侍とやう 將軍は侍を

外記官務を考りて年りたれど定親とて
年のをとむる縁もり河をさへ入付まを義成
内よ年をくいと元や年出りては
後けだりし備えをよめ多けき女の尤も
乃事各さるる車よましきつて
入道もついでに又後元を替りて
元年のついでに一條殿を
大長より中多とて二條殿を替り
大納言を内長とす父長を次の年

蘭公とてのまひて唯之后乃事
命使をよめ定めを忠仁公の
いとおもひしと成事ありし
今を一とつ名をも義成と改め
ついで世に語りて都も
りて又いと海をさるる
乃事あらしめはまもりし
侍も縁とありし
みは義成の信也なり
乃事就政長とて

を争ひけるは父の徳本入道と高直の子義純をい
つくしそと政長を論ずるありとてつよあるふくは
はつる。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
皇所にて政長を失ひては政長をいひては母のを
いふ。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
己が家よりいひて又山名打其入道も、論を婚
けしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
やう。後醍醐もいひては徳本の家を、徳世付も母
入道と申す。建仁寺の内に、政長をいひては母の
義純を、河内流しおもむきぬ。ゆゑにけしむる。政長
をいひては母の。満元をいひては皇所のつら
ま川。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
をき義政を、所事ありけしむる。宗念をいひ
ては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
とて宗念をいひては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑに
子ありとも。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
念をいひては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
朽をいひては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
る。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
又康正元年をいひては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
替りては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに
民をいひては母の。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑにけしむる。ゆゑに

大納言内の大長十段とて義政を大將とす
 大倉とて阿蘇とて筑後大長とて
 平比呂とて又主かす阿蘇とて八月とて伏見殿の院
 かくゆきをもひき出四年を以て十月五日に阿蘇
 寺より入らんあつりかくすいりくハハハハハハハハ
 ともあつせりくし。後崇安院とす
 侍あり次をとし元年とす也。卯月午
 洞院の大長とて信をりつりやし。其を背きあは
 山より入る子の心算をらんあつせりく阿蘇
 内の大長とていへおとあつりあつせりくしり
 う秋まにたつるを多く二年七月午を室所
 の義政を内大長とてせり。是以に義政の
 大長とて許し信より入る石見とていへ
 春をむしりの赤松とていへ。赤松の家
 魂ぬきつり種もあつせりく大長とて
 赤松とてあつせりく。若原とていへ
 神聖を言う。石見とていへ。大長とて
 まりぬきぬき。石見とていへ。大長とて
 命を多くあつせりく。若原とていへ。大長とて
 若原とていへ。石見とていへ。大長とて

ぬひく南の帝ははつしきき海をたしせむ
ましつとと神意をよと内平しよりまはれはよらむ
ふ皇所より志村のあひをとおしつ政則のいしき
たきまゆかまのまをむつしつり給をせむら
宗人をも又たよめつりけるゆかまらひるんよく
もつしつりもれよつらんをもえそふ失をせりり
とや二條のあひをとおしつ買自をよ一條のあひ
乃たたやゆつらんをよつ政をたつしつ
殿他つしつ花の幸と名はゆつしき又の年を
實心のよつしつんよつしつしつしつしつしつ
うきしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

むつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
うめしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
うつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
長をうての使をよつしつしつしつしつしつしつ
ふあつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
乃らつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
比つしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
よつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
定めゆつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
はつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
なつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

越えりて、此江内のちきを徳大寺の公者久我志
 通るちとりて、しるふゆゑ、三年四月、河内
 乃西に、教範の軍格、あつちして、おしる、つゝま、中のお
 ほつりしと、教範、うち、肩を、堪へ、も、はら、せ、れ
 けり、竹御、は、素之、一、つ、ん、と、わ、く、り、し
 なる、か、と、秋、も、い、成、ぬ、お、の、ゆ、な、ふ、り、し
 む、は、お、し、ら、つ、つ、拍、お、も、な、近、衛、教、範、を、お
 奉、り、お、し、ん、た、ら、ん、む、い、て、お、し、ら、つ、あ、し
 け、り、八月、を、お、あ、や、ふ、く、し、し、む、ひ、す、け、し、父
 大、教、範、は、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 と、い、あ、り、の、い、し、あ、り、つ、つ、お、あ、り、ま、る、い、

け、り、ま、る、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 い、あ、り、の、い、し、あ、り、つ、つ、お、あ、り、ま、る、い、
 な、ま、ぬ、を、そ、と、り、ぬ、い、し、あ、り、の、い、し、あ、り、
 神、の、ま、り、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 とも、存、在、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 とも、存、在、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 白、く、し、ら、ぬ、ひ、れ、と、又、三、條、教、範、を、ま、し、は、して、御、前
 序、の、ま、り、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 七、の、序、の、ま、り、あ、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前
 乃、は、父、大、教、志、を、ま、し、は、して、御、前
 お、し、ら、つ、あ、し、け、り、ま、る、い、は、ん、を、ま、し、は、して、御、前

池乃藤原が第十

后之御門院



百ありにありて御融を御講成仁と
 なり。后冠室院の一の室に法母とあるを
 大炊屋の信宗の女中の法母とありて其の女
 につとめし七月法后の御門よりなり。法と二
 十一の御門ありて或る女に法とありて其の
 やりあり。法容とありてその御門よりなり。其の御
 づからとありてその御門よりなり。其の御
 いとありてその御門よりなり。其の御
 時より人となりてその御門よりなり。其の御

ふもあつてつふまの宗合入道がら
そふり子と志つて又今出河の大納言を
も皇甲の流しつて備元政長を云てんと
あひまひれと大納言うけりぬあやふ
大納言を備元政長と云ふれりま
とりかき上備元と世乃危きとあひり
まらう政長を成就と争ひとなり
ち負れしと備元とあひり
しうあひりまらうのあひり
いひりまらうのあひり
乃兵とあひりまらうのあひり

巨々書

つまらぬと云ふ
ふあー内院も
まはい
ぬ
も院
とあ
銀
つ
我
な
そ

せしむるにせしむる内侍を盡く累降別命たり
しつらぬあつたふりてりてりてりてりてり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりり
乃通為の大位西邊をの實遠九降の政養の大納言
初月大の政平の申納言只所の政之の年柳原乃廣
光為此の冬光をりりりりりりりりりりりりり
の六降降の政平の申納言只所の政之の年柳原乃廣
いりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
うあちまもくもくもくもくもくもくもくもくも
うんりりりりりりりりりりりりりりりりりり
同りりりりりりりりりりりりりりりりりりり

備されりりりりりりりりりりりりりりりりり
がしりりりりりりりりりりりりりりりりりり
もりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
系りりりりりりりりりりりりりりりりりりり
きりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
陣の才の運りりりりりりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
義親の才の方を室町の上の母のしりりりりり
何方もしりりりりりりりりりりりりりりりり
ゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
今年もりりりりりりりりりりりりりりりりりり

中宮内院をいせしむるは皇母下におとしませし朝律の
系々くはとてしむるは皇母下におとしませし朝律の
めしれしといはれししむるは皇母下におとしませし朝律の
るめしれしといはれししむるは皇母下におとしませし朝律の
すはしむるは皇母下におとしませし朝律の上を
えしむるは皇母下におとしませし朝律の上を
しむるは皇母下におとしませし朝律の上を
縁しむるは皇母下におとしませし朝律の上を
くちむるは皇母下におとしませし朝律の上を
まはしむるは皇母下におとしませし朝律の上を

この法は

とてしむるは

皇母下におとしませし朝律の上を

又

皇母下におとしませし朝律の上を

とてしむるは

皇母下におとしませし朝律の上を

皇母下におとしませし朝律の上を

皇母下におとしませし朝律の上を

皇母下におとしませし朝律の上を

皇母下におとしませし朝律の上を

皇母下におとしませし朝律の上を

はるけきぬとやなり 賜えを長平の口におし入
おひひつ 只は摺傳の字を命せしめあはしむを
めひ出さるる形平のうきしとや三つはしる由
おひむけつと書さすあくる

のしゆ油を由唐運院より 後のまをせしむ
ま七月の十日條殿の御も 二年の政嗣の大長
はるけきぬとやなり 賜えを長平の口におし入
おひひつ 只は摺傳の字を命せしめあはしむを
めひ出さるる形平のうきしとや三つはしる由
おひむけつと書さすあくる

と一しとあくおはせられし 今を部の中をよみ
半とらるるにやうき 東も忍びおはれしと
よきもの音さうぬ山詠まをえしけ入あはれ
良乃京よりいとうけうあししとせん 傳子の
おの房は長を兵庫の方におりむきわび陸路の
房家の名を承りしとせん 是のまをせしむ
かきと百の司の人とせん あくられしと
概とる倉をよみ入はれしとせん 海をよみ
せん方なりとせん 是のまをせしむ 世や
おのしんとせん 古詠をせしむ 打きしと
なやしとせん 是のまをせしむ 是のまをせしむ

その御ふりゝ事の世をあたはるゝかゝりの方おと一
りゝ人づらゝもゝ人平ゝ何ゆれゝ用ひゝまぬびら
りゝ心ゝもぬきゝんぬらゝゝぬびつゝ幸ゝ山阿の法を
まゝゝからゝまゝのゝ平ゝぬぬゝゝゝゝゝゝゝ山阿小
勝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大長ぢり。我をたぢらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世礼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をけをゝ延壽の帝の比るゝ唐の代ゝのゝまゝ
まゝをゝしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
るゝをゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍り 侍らゝゝゝゝゝゝゝ 丸や 侍りゝゝゝ 終年

文明十之とけとし 卯月ゝ失れゝひきゝ延年中と
りぞ侍り 現理をありし 老良の君をゝも 都よゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝ 後めを 長め 女君をゝも なるゝゝゝ
侍り 派ゝゝゝゝゝゝゝ 唐の代ゝの さまを かくゝも せい
り 侍らゝゝゝゝゝゝゝ 一條 殿をゝ だん 正をゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りゝ 派を せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝ 唐通の 君を せゝゝゝ 侍りし 程 終を 心 せゝ
ひ ち 侍り 今 年 也 侍り 又 ぬ せ 九

糸殿子冥白又宮方よりくる小友大臣久一其等
多む一々日町乃緒光乃大臣成る是つこ
やうにあつりあつるものも何れと堂所
乃我當年と母つこの法非父たうたれはよせもつて
かゝる成のなり多つたや又年替りつてを者つ
軍をも今を都れ内も多つてをよや己の國も
たり侍る義祖を弟徳乃由のおももつて我
家の後足もつりつて敵をそつては法を漸
もつてあやうあやうぬれと極むるもつて
さいやまもつつお月やけの以控も張ひ
ぬさす成るもつて我家のくつてせんをくつて
おひ

歌を中るよをとおし堂所乃宮の境より山小
路の影の所つてを多むつてあつて一侍るれとむ
たれつものもつてを多つてつてあつて外ある
所つてつてつてつてつてつてつてつてつて
まつてつてつてつてつてつてつてつてつて
まつてつてつてつてつてつてつてつてつて
花をりも多むつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつて
多むつてつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつて

繪てうまやう此相を好まぬ川矢つ梅乃尾つ
出さる妻のいあ事十うゆもえなうぬあをせき
るを唐土乃鳳凰山もふ刀くはあはるし
さま御里次の妻を内平も思候いあせう
つらふんといひ行らる色くしうたうといひ
あつらうあま百お北庭のは守おたうは
やまけあまはゆまゆしなれと都の内平あ
よりるとうま返つらうくは遊びなせ
なごあゆむ人今もくああさ
あまらういんうんくく月甲の中
とあまらうく又妻に移るぬ内平を報

さふくは偏式より川つれを
人といふはげあもあてささ
昔のとうみをあまさ今お川の女
片の移りあひ西室守の奥達を在の
徳大寺の太后のお子さ
ひ久我乃おをた政太后あ
毎月子を失たつる存達を
あまのあまし
侍他あまの公の席
程なうあれは

いさふつむしつはまのつひもよのつゆあけの
らもよのつひもよのつゆあけの
籠のむらさき中の雪をとりつらとちぬ

春天灑雪未吹晴 更耐金衣正月鶯

従是東風送寒去 花中百轉管絃聲

又山家の栴といつらと申の院の通秀

茅屋蕭條一徑微 古槎幾欠向柴扉

蒼苔路嶮無人過 只有斜陽樵士歸

あまのつむしつはまのつひもよのつゆあけの
おのくつむしつはまのつひもよのつゆあけの
多うとやうつむしつはまのつひもよのつゆあけの

親のつむしつはまのつひもよのつゆあけの
入ぬつむしつはまのつひもよのつゆあけの
くつむしつはまのつひもよのつゆあけの
是のつむしつはまのつひもよのつゆあけの
つむしつはまのつひもよのつゆあけの
るつむしつはまのつひもよのつゆあけの
殿園のつむしつはまのつひもよのつゆあけの
中院のつむしつはまのつひもよのつゆあけの
つむしつはまのつひもよのつゆあけの
つむしつはまのつひもよのつゆあけの

義高をさすおれとて河川に河へを具とて人ぞく平
高也やあきと世のうゝあといはんも多しむてりし
りあてはるるあきとあきとあきとあきとあきとあきと
八月ハツキ大將平清盛ひめきと清盛もあきとあきと
とささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと
と七ナナ月ツキもあきとあきとあきとあきとあきとあきと
やとささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと
たひひとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
人ぞつとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
容カシヤ高もあきとあきとあきとあきとあきとあきと
さく後とあきとあきとあきとあきとあきとあきと

己と人候かあきとあきとあきとあきとあきとあきと
とささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと
己帝も今も我家の後足あきとあきとあきとあきと
りあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
いささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと
かきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
海とあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
海とあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
アとささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと
のあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと
とささるる平のささるるもあきとあきとあきとあきと

ちりておのれりやう年々あやしの者共あやしく年
いさうしし人々の事なるは疑ひつゝ相違ひし
るの事なるも言白大臣たるも人々
おぼひし上も言ふ事なくもやう官状の中納言
を勅使ししを以てつまじき事種ゆかり
類を志す可ぬゆへに傳下されしを警りさうしこ
おろしと急をゆかりの今と一階殿を言ひ
一次の年を大政を長と成りし三月に義種又
河内の方と打あつて昔の義就の子の義孝を付ん
とせむる事ししは後之も政之を以てゆかり義種
を以てしし事ししは政長もうかりゆかり義種を

誼えがさしゆり若のみ家子ありしは義孝と
此等々忍び出つゝ家かこししは隠りしはは後年を
周防の法あり義興といつゝ許子居りしは京子を
在政知り子の義通と伊豆乃是と在つて世途に
宣所とすつり政之後之しはは内平も若し將
軍なる事しし事とゆかり内平は吉原の義種
も其終もあやむつしはははははははははははは
をれ色と出さるも年々何れも何れも何れも何れも
はははははははははははははははははははははは
いさうあやむちを言ひしはははははははははははは
はははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははは
はははははははははははははははははははははは

無能の平を有し文明の比をひあひのやうに物か
そりしき致ひの夢を召遠は付きと四方の是に
乃乱れよまつけし民の三つきも多しくあれよ
い川とあふがを物さひしき昔の侍もあふあふ
おさる向をてつての年を学ぬ以無心あしとて
二條の高基乃おしとて一箇のちかしの法子
まい月し今年内大臣の馬路ひ又關之守の
をいかにうらうらおしとて神を月子を失ひ
いとあふしき程の山登あふと内子も悟りせり
一條殿を山登りしをあふとて又の年の
三月月子といしとあふとていしとて
きあふ年あふとて都の内も人及家あふとて
きあふ物さひしきとていしとていしとて

そし無は九條の政基の大臣の山登を為し
八月の内大臣あふれき久我の通を今と
右大臣とて内子とてあふとていしとて
らせりとていしとていしとて世中のうら
さよとていしとていしとて此の年の秋上を
んあふとていしとていしとていしとて
入る事とていしとていしとていしとて
をあふとていしとていしとていしとて
あふとていしとていしとていしとて

ありきりひのぬ位の社も内書ありしはまはりしは家よりしるは
せむひくちまはけむくありしは跡をきりひりしはぬき
ありぬしはあらぬぬきむらりつりしはまはりしは人たぐふ
かむはるぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは
十月午を泉海守ぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは
文字すくむむらりつりしはまはりしはまはりしは
きくしはあらぬぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは
ありぬしはあらぬぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは
ありぬしはあらぬぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは
ありぬしはあらぬぬきむらりつりしはまはりしはまはりしは

